

陳寅恪『唐代政治史述論稿』

「上篇 統治階級之氏族及其升降」訳注稿 (3)

陳 寅 恪 著／森 部 豊 訳

Chen Yinque, *Tangdai Zhengzhishi Shulungao*, Chapter 1;
Part 3

Translated by MORIBE Yutaka

This article represents a Japanese translation of Chen Yinque's *Tangdai Zhengzhishi Shulungao*, which was published by Chongqing in 1943. This book comprises three parts: the first section is entitled “Tongzhijiejizhishizu ji Qishengjiang,” the second section is “Zhengzhigeming ji dangpaifenyue,” and the third is “Waizushengshuaizhilianhuanxing ji Waihuan yu neizheng zhi quanxi.” This article marks a translation of Chapter 1 and represents a continuation of previous work (Bulletin of *the Institute of Oriental and Occidental Studies*, Kansai University, No.54, 2021 and No 55, 2022)

キーワード：陳寅恪 (Chen Yinque)、唐代政治史述論稿 (Tangdai Zhengzhishi Shulungao)、河朔三鎮 (Heshuosanzhen)

【凡例】

- 本訳注は、1947年に上海商務印書館から出版された陳寅恪『唐代政治史述論稿』（以下、1947年版）を底本とし、脚注において『唐代政治史略稿 手写本』（上海古籍出版社、1988年。以下、手写本）との異同示した。訳文は1947年版に拠る。
- 1947年版において、陳寅恪は補文を（ ）で示し、補注を〔 〕で示しているが、本訳注では陳寅恪による補文、補注を（ ）で統一して示した。
- 本文中の訳者による補訳、補注は〔 〕で示し、また脚注で訳注をしめした。
- 陳寅恪は手写本において、「（ ）は不要で小注に改める（括弧不要、改作小注）」などの指示をしているが、この点、本稿ではふれない。
- 引用史料中の用語や陳寅恪の使用した用語のうち、「夷狄」「胡」などは訳さず、「 』で原文のまま示した。これらを異民族、非漢族などと訳すと、原史料や陳寅恪が伝えるニュアンスが薄れると考え、これらの語句はあえて訳しなかった。ただ、具体的エスニックグループを指すことが明らかな場合、ルビの形で訳を付した。
- 陳寅恪は史料引用の際、原文を省略しながら引用する場合があるが、それらは「(上略)」 「(中略)」 「(下略)」と明記する場合と、「略曰」と言うのみで、省略箇所を示さない場合とある。前者は原文のまま示し、後者については、訳文において「……」で省略部分を示した。
- 前回の訳注稿と同じく、陳寅恪の使用する「漢化」「胡化」などは「 』で原文のままであることを示し、特に訳者が解釈する場合はルビにて示した。
- 今回訳出する箇所につき、1947年版、手写本ともに改行して新たな「節」（小見出しは無い）として扱っている。一方、大陸で出版されている現行の上海古籍出版社版や生活・読書・新知三聯書店版は改行せず、前段の宦官の出自の箇所と連続して扱っている。

【訳注稿】

上編 支配階級の氏族とその交代（その3）

唐代河北藩鎮の見方

唐代の中国の領域の内には、安史の乱以降、皇室の李氏を擁護する地域、すなわち東南地方の経済力と「漢化文化」によって維持される長安を中心とする集団のほか¹⁾、それとは別に河

1) 1947年版は「即以東南財富及漢化文化維持長安為中心之集團外」。手写本は「即以東南財富及漢

北藩鎮という独立した集団があった。河北藩鎮の政治・軍事・財政は長安の²⁾中央政府と実のところ、まったく隷属関係がなく、その民間社会³⁾もまた漢族の文化の影響を深く受けていなかった。すなわち〔唐代後半の河北地域には〕長安や洛陽における儒教の教養はなく、科挙による進士及第を立身出世の帰結とする習慣もなかったのである。そのため、唐代の河北藩鎮の問題を論じるには、必ず民族と文化の二点に注意しなければならず、それによってはじめてことの真の核心に迫ることができるのである。ここではまず二、三の顕著な例を挙げ、そして当時の大唐帝国⁴⁾の版図の中に実にはっきりと異なった二つの文化圏があったことを確認し⁵⁾、その後、さらにその種族と支配階級の関係を推論⁶⁾していく。

杜牧『樊川文集』巻9「〔唐〕⁷⁾故范陽盧秀才墓誌」に次のようにある。

秀才の盧生の名は霈、字は子中という。天宝以後、三代にわたり、燕〔幽州・盧竜節度使〕に仕えた者もいれば、趙〔成徳節度使〕に仕えた者もいた。この二つの地域は土地が肥えて馬を飼育していた。二十歳になるまで古代に周公や孔子という人がいたことも知らず、ポロを撃ち、酒を飲み、ウサギを追いかけ騎射し、日常の会話や習慣は、すべて攻めたり守ったりという戦闘に関わるものだった。

『通典』巻40「職官典」の末尾に杜佑が建中年間に上奏した「省用義」におおよそ次のようにある⁸⁾。

今、〔河朔三鎮の一つ魏博節度使の〕田悦^{やから}の輩はみな平凡で大局がわからない人びとです。刑も徴税もめっちゃくちゃですが、ただ軍隊だけは丁寧^{やから}に扱い、文人官僚は奴隷のごとく扱われています。

これは、河北社会の一般的状態を代表するもので、戦争することを重視し文化・学問を軽視し

「族化文化維持長安之宮禁闈寺及外廷士大夫等統治階級一集團而外」とする。

2) 手写本は「長安」を削除する。

3) 手写本は「民間」を削除し、「社会」とする。

4) 手写本は「帝国」を削除する。

5) 1947年版は「以見當時大唐帝國版圖以內實有截然不同之二分域」。手写本は「以見當時大唐版圖以內實有社会文化截然不同之二分域」

6) 1947年版は「推論」。手写本は「推」を削除する。

7) 1947年版には「唐」字は無い。手写本では「唐」を補う。

8) 手写本では、参考史料として「『新唐書』巻166杜祐伝」を補筆している。

ていた⁹⁾。端的に言えば、河北社会は「胡化」の度合いが深く、「漢化」の影響は薄かった。

進士合格者と河北藩鎮

当時、「漢化〔漢文化〕」の中心は長安にあり¹⁰⁾、詩賦の才能によって科挙に合格し、出世して高位高官になることが社会心理上、大勢の赴く目標であった。そのため、当時¹¹⁾、長安文化圏内において権力や名声を望みながらその志を得ない者は¹²⁾、やむを得ない時、ただ北方の河北に行く道しかなかったのである。『韓昌黎集』巻20「董召南の河北に遊ぶを送るの序」は、ひろく習読された文章であるが¹³⁾、本書では長安集団と河北集団の政治・文化の対立の形勢を明らかにする見地から、この「序」を以下に引用し¹⁴⁾、あわせて解釈を加え、自説を証明していきたい。韓愈が、董召南の河北行きを正しいことだとは思っていないことは、非常にはっきりしており、解説する必要はない¹⁵⁾。その文に次のようにある¹⁶⁾。

燕と趙〔の地、すなわち河北〕は、古くから、感情に激しやすく、痛切な情のこもった歌を唱和する人が多かったところだという。董生、君は進士に挙げられたが、〔連年吏部の試験に阻まれて〕仕官の志を得られなかったので、すぐれた器量を身に抱きながら、不平に心ふさがりつつ、この河北の地に行こうとしている。私は君が必ずその地の人々と気質の合うことがあるのを知っている。董生よ、勉めて行くがよい。

これによれば、長安における文化統治下の士人は、もし進士に挙げられても試験に合格せず、立身出世の機会を欲するものは、北のかた河北へ赴く以外、そのほかの道を探し求めることは容易ではなかった。

「董召南の河北に遊ぶを送るの序」は続けて次のようにいう。

9) 1947年版は「其尚攻戦而不崇文教」。手写本は「其」を削除する。

10) 1947年版は「當時漢化之中心」。手写本は「之」を削除する。

11) 1947年版は「當日」。手写本は「當時」とする。

12) 1947年版は「有野心而不得意之人」。手写本は「有野心而」を削除する。

13) 1947年版は「乃世所習誦之文」。手写本は「乃世人所習誦者」とする。

14) 1947年版は「對立之形勢起見、仍遂寫之於下」。手写本は「對立形勢之故、仍遂寫其文於下」とする。

15) 1947年版は「不待解説也」。手写本は「自不待解説也」とする。

16) 1947年版には「其文云」があるが、手写本は削除する。また、以下、「董召南の河北に遊ぶを送るの序」の訳文は、前野直彬（『文章軌範』明治書院（新釈漢文大系）、1962）および星川清孝（『唐宋八大家文読本』明治書院（新釈漢文大系）、1976）を参考とした。

いったい君が時世に不遇であることを、かりそめにも正義を慕い、仁愛の道につとめる者ならば、みな愛し惜しむのである。まして燕趙の慷慨悲歌の人士の、その天性に出た者たちが愛惜するのは勿論のことである。しかし私は以前に聞いた、土地の風俗は教化によって移りかわるものだ、と。私は、その地の現在が、古からいう通りとちがっていないと、どうして知ろう。それはわからない。そこでしばらく、君の今度の旅で、その地の気風がどうであるか卜ってみようと思う。董生よ、元気を出して行くがよい。

先に引用した范陽の盧秀才墓誌の「日常の会話や習慣は、すべて攻めたり守ったりという戦闘に関わるものであった」という一文と、この序の「土地の風俗は教化によって移りかわる」という語句によれば、当時の河北社会はまったく「胡化」しており、後漢・魏晉・北朝の時のような状態ではなかったことがわかる。もし、そうなった理由を究明するなら、おそらく民族移動という一つの事実においてこれを求めれば得ることができるだろうが、後論を待ちたい。

またその文に次のようにいう。

私は、君が河北に行くことから感じることがある。私のために望諸君¹⁷⁾の墓を弔ってほしい。そして燕の市場を見て、そこに昔の犬の屠殺者〔の高漸離¹⁸⁾〕のような人物がいたら、私のために挨拶して、こう言ってくれたまえ。「〔今の唐の世には〕明徳な天子が君臨されているから、世に出て朝廷に仕えるべきだ」と。

また『全唐詩』第10函「李益小伝」（『旧唐書』巻137、『新唐書』巻203「文芸伝下」李益条、『唐詩紀事』巻30¹⁹⁾、『全唐詩話』巻2など参照）に次のようにある。

李益、字は君虞といい、姑臧の人である。大暦四年に科挙の進士科に合格し、鄭県の尉を授けられたが、長い間、人事異動がなく〔出世せず〕、李益は満足しなかった。そこで北へ行き河朔の各地をまわった。そして、幽州〔節度使〕の劉濟が彼を辟召して従事とした。かつて劉濟に詩を献じ、その詩のなかに不満を思ふ言葉があった。憲宗の時、〔中央

17) 戦国時代、燕の名将だった楽毅のこと。

18) 戦国時代の燕にいた人。楽器の筑を撃つのが上手だった。秦王政を暗殺しようとした荆軻の友人で、燕の市でともに酒を飲んでいてエピソードがある（『史記』巻86「刺客列伝」）。

19) 手写本は「『唐詩紀事』巻30」と『全唐詩話』巻2の間に「及辛文房唐才子伝李益伝等」の一文を加える。

に] 召されて秘書省少監・集賢殿学士となったが、才能と家柄を自負し、傲慢なふるまいが多く（侮ったり無視することが多く）、そのため周囲から受け入れられなかった。諫官が幽州における詩の句を問題としたため、降格し散官のみの職無しとなった。

李益の「劉濟に献ず」の詩には、次のようにある²⁰⁾。

草緑^{いにしえ}たり古の燕州、鶯声引きて独り遊ぶ。雁は帰る、天北^{ほとり}の畔、春は尽く、海西^{ほとり}の頭。日に向いて花偏^{いにしえ}に落ち、年を馳せて水は自ずから流る。恩を感じて地有るを知る、上らず望京楼。〔大意：^{いにしえ}古の燕州の地は草木で緑におおわれ、鶯声が鳴きひびき独り遊ぶ。雁は国境のはるか北^{ほとり}の畔に帰り、春は尽く、西の塞外にあるロプノール^{ほとり}頭。太陽に向かって花はひたすら散っている。歳月が過ぎ去ると同時に水は流れている。私は幽州節度使の劉濟殿の恩を感じ、ここに自分の居るべき場所があることを知っている。だから私はあえて中央の官職には就かない〕

これによれば、また、すでに科挙の進士科に合格した李益といえども、満足することができず中央を去って北は范陽〔幽州〕へ行かねばならなかったことがわかる。とすれば、董召南が河北に赴いたことは、当時の社会の常態であり、日常なことだったのだ。そうならば、ここにおいでますます大唐帝国後半期には、帝国の中に二つの独立し敵対する集団があったことをみることができ²¹⁾、そしてこの二つの集団の統治階級は、その種族と文化もまた当然、異なっていたということが出来る²²⁾。

「胡化」する河北

今、試みに『新唐書』『藩鎮伝』をしらべ、あわせてその他の関連する列伝の人物で、その活動範囲が河北あるいは河北以外にある者を取り上げて相互に参照してみると²³⁾、二つの点を

20) 1947年版は「考益之獻劉濟詩云」。手写本は「益獻劉濟詩云」とする。

21) この段落について、1947年版と手写本では、大意は変わらないが、細かな語句の修正・削除がある。以下、手写本の加筆・修正をゴシックで示し、書換え部分は——で示す。

據此、亦可知雖已登進士第之李益以仕宦不得意之故猶去京洛、而北走范陽幽州、則董召南之遊河北蓋是當日社會政治之狀常情、而非變態。然於此益見夫唐帝國之後半期其李唐三百年之帝國中含兩獨立敵視之團體、……。

22) この段落の最後は、1947年版は「亦宜有不同之點在也」、手写本は「在」を削除する。

23) 「あわせて……相互に参照してみると」の部分。1947年版は「並取其他有關諸傳之人其活動範圍在河朔以外者以相參考」。手写本は「並取其他有關列傳所載之人凡其活動之範圍在河朔以外者參考之」

発見することができる。一つは、その人の出身氏族がもともと「胡類」であって「漢族」²⁴⁾でないこと、もう一つはその人の出身氏族は「漢族」であるけれども、長い間河朔に居住し、しだいに「胡化」し、「胡人」となら変わりないことである。前者は種族の問題で、後者は文化の問題である。はっきり言えば²⁵⁾、唐代の安史の乱以後の情勢というのは、およそ河北²⁶⁾およびそのほかの藩鎮と中央政府との問題²⁷⁾であり、その核心はまさに種族と文化の関係にあったといえる²⁸⁾。そもそも河北の地は、後漢・三国魏・西晋の時には〔儒教〕文化が非常に高い地域であった。「胡族」の乱²⁹⁾を経たといっても、北魏から隋にいたるまで、河北の地の「漢化」³⁰⁾は依然として衰える様子を見せなかったが、どうして玄宗の統治のあざやかに輝く治世になって、「胡化」した地域となってしまったのだろうか？³¹⁾その理由は、簡単には解けない。ここでは、安史の乱が起こった地域とその前後の時代の関係について総合的に推しはかり³²⁾、一つの仮説を示すことによって、さらに詳しく確かな証明を待つこととしよう³³⁾。もしこの仮説が時には明確に筋が通りにくくとも³⁴⁾、安史の乱とその後の河朔藩鎮の本質については、少なくともこれによって明らかになるだろう³⁵⁾。

安禄山の出自

玄宗皇帝が文武両面において輝かしい統治をした時代、漁陽〔幽州〕で戦陣の太鼓が打ち鳴らされるや、〔洛陽と長安の〕両京はあつというまに陥落した。〔結局、〕安禄山の覇業は成功

↘ と修正する。

24) この「漢族」と後出の「漢族」ともに、手写本は「漢種」とする。

25) 1947年版は「質言之、唐代安史亂後之世局」。手写本は「質言之、則唐代安史亂後之世局」とする。

26) 1947年版は「河朔」。手写本は「河北」とする。

27) 1947年版は「問題」。手写本は「關係」とする。

28) 1947年版は「其核心實屬種族文化之關係也」。手写本は「其核心實一胡漢種族文化之問題也」とする。

29) 1947年版は「胡族之亂」。手写本は「五胡之亂」とする。

30) この「漢化」は「漢文化」の意味だろう。

31) 1947年版は「仍未見甚衰滅之相、何以至玄宗文治燦爛之世、轉變爲一胡化地域？」。手写本は「仍不衰滅、何以一至玄宗之時、即一變而成一胡或地域」とする。

32) 1947年版は「茲就安史叛亂發源之地域及其時代先後之關係綜合推計」。手写本は「姑就安史叛亂本身之地域及時代約略綜合推計」とする。

33) 1947年版は「以俟更詳確之證明」。手写本は「以俟證明」とする。

34) 1947年版は「即使此假說一時難以確定成立」。手写本は「即使此假說不確」とする。

35) 1947年版は「但安史叛亂及其後果即河朔藩鎮之本質、至少亦可因此明瞭也」。手写本は「但安史之亂及其後果即藩鎮本身之性質、亦可藉以明瞭也」とする。

しなかったけれども、しかしその部将たちは、一貫して河朔に割拠して中央政府に対抗し、唐室もまたこれより振るわず³⁶⁾、滅亡していった。古今、安史の乱を論じる人たちは、その過ちを天宝時代の政治と宮廷の腐敗のせいにするだけだが、これはもっともなことである。しかし、ただいまだ安史軍がおのずから体系的な戦闘に優れた「民族」³⁷⁾から構成されていて、当時の軍事面において、ほんらい、敵になるものが無かった³⁸⁾ということには注意していない。安祿山の種族を同時代の人の著作やそのことを専門に書き記した書籍の中で調べてみると、ひとしく「柘羯」あるいは「羯胡」と言われている³⁹⁾。例えば、『旧唐書』巻10「肅宗本紀」に、

(天宝十五載七月甲子) この日、靈武城の南門にお出ましになり、制を下していった。「……先に羯胡が平常な世界を乱し、宮城⁴⁰⁾は陥落し……」(『旧唐書』巻120「郭子儀伝」には建中二年、徳宗の褒卹の詔に「羯胡作禍」とある。また『新唐書』巻192「忠義伝・張巡伝」にもまた「柘羯千騎」の語句があり、杜甫の「官軍已に賊境に臨むと聞くを喜ぶ二十韻」にいうところの「柘羯臨洮を渡る」の柘羯は安祿山を指すのではないが、また傍証の参考となるだろう。)

とあり、また『旧唐書』巻104「封常清伝」には、

〔安祿山軍の〕先鋒が葵園に至った。封常清は精鋭な騎兵をして柘羯を迎え戦わせ、反乱軍を殺すこと数十から百にのぼった。……〔この日〕処刑にのぞんで……その表に曰く「……過去に羯胡と接戦し……」⁴¹⁾と。

ある。また『顔魯公集』巻6「康金吾碑」⁴²⁾では安祿山を「羯胡」とみなし、姚汝能『安祿山事迹』もまた「羯胡」の語が多く、杜甫の「詠懐古跡」の詩の「羯胡^{しゅ つか} 主に事うるも終に無頼

36) 1947年版は「唐室亦從此不振」。手写本は「而唐室亦未能實際恢復且因之不振」とする。

37) 陳寅恪は本書叙述において「種族」の語を用いるが、ここでは「民族」を使用しているので、このままとする。

38) 1947年版は「本來無與爲敵者也」。手写本は「本來無敵者也」とする。

39) 1947年版は「考安祿山之種族在其同時人之著述及專紀其事之書中、均稱爲柘羯或羯胡」。手写本は「考安祿山之種族唐代与其同時之人及專紀其事之書中、俱稱爲柘羯或羯胡」とする。

40) 1947年版では「兩京」とするが、手写本では「京闕」と修正する。『旧唐書』テキストは「京闕」。

41) 1947年版の引用は「臨終時表曰。昨日與羯胡接戦」。手写本は「昨日」を「昨者」と修正。ただし、現行の『旧唐書』テキストは、「是日臨刑、……其表曰「……昨者與羯胡接戦……」」である。

42) 正確には「特進行左金吾衛大將軍上柱国清河郡開国公贈開府儀同三司兼夏州都督康公神道碑」。この碑文はテキストによって大きな違いがある。四部叢刊本では「羯胡」は見えない。

たり（羯族の安祿山たちは君主にお仕えしながら結局は小ずるい悪党だった）」の句のごときは⁴³⁾、すなわち梁の侯景の古典（例えば『梁書』巻55「武陵王紀伝」に「羯胡が跋扈した」があるのが、その一例⁴⁴⁾）を用いるのみならず、実に当時の事実をあわせ取り、詩に読み込んだものだろう。

玄奘『大唐西域記』巻1「颯秣建国」条に⁴⁵⁾、

その軍隊は強く盛んで、多くは「赭羯」である。「赭羯」の人は、その性格は勇烈で、死ぬことを家に帰るように普通のことだともっている。

とあり、『新唐書』巻221下「西域伝下」康条に、

〔康国は……〕もとは月氏の人で、初めは祁連山の北の昭武城にいたが、突厥（「突厥」は「匈奴」とすべきである。『唐会要』巻99「康国伝」）の破るところとなり、ようやく南へ移動してパミール高原により、その地に定住し、その子孫はそれぞれ土地をわけて王をいただいた。それらの国は、安、曹、石、米、何、火尋、戊地、史といい、代々これを九姓といい、みな昭武を氏とした。

とある。また『新唐書』巻221下「西域伝下」康条には⁴⁶⁾、

〔安国は……〕勇敢かつ壮健な者を募って柘羯とする。柘羯とは中国で戦士というようなものだ（私は、次のように考える。すなわち、先に引用した『西域記』の文に⁴⁷⁾「赭羯」の人と見えており、とすれば「赭羯」は種族の名であり⁴⁸⁾、ここで「中国で戦士というようなものだ」というのは⁴⁹⁾、宋景文⁵⁰⁾の誤りでなければ、後世、固有名詞から一般名詞に派生したのであろう)

43) 1947年版は「若杜工部……」。手写本は「至杜工部……」とする。

44) 1947年版は「(如梁書伍伍武陵王紀傳云：「羯胡叛渙」即是一例)」。手写本は「(如梁書伍伍武陵王紀傳云：世祖又与書曰「……羯胡叛渙……」即是一例)」とする。中華書局標点本『梁書』（修訂本）は「世祖又與紀書曰」とする。

45) 1947年版は「考玄奘西域記壹颯秣建国〔即康國〕條云」。手写本は「考」と「即」を削除する。

46) 1947年版は「又同書同卷安國傳云」。手写本は「又安國條云」とする。

47) 1947年版は「上引西域記之文有……」。手写本は「之文」を削除する。

48) 1947年版は「然則赭羯乃種族之名」。手写本は「之名」を削除する。

49) 1947年版は「此云「猶中國言戰士」」。手写本は「此言「猶中國戰士」之義」

50) 「景文」は、『新唐書』の撰者である宋祁の諡。

また『新唐書』卷 221 下「西域伝」康条には⁵¹⁾、

石はあるいは柘支といい、柘折といい、赭時という。

とある。これによれば、「赭羯」は「柘羯」の異なる訳語であることがわかる。だいたい康や安、石など中央アジアの月氏種族の人は、みな勇猛で壮健で武芸に優れていることで聞こえていた。『旧唐書』卷 200 上「安祿山伝」に、

安祿山は営州柳城の雜種胡人である。

とある。『旧唐書』⁵²⁾のいう「雜種胡」の適切な定義は、なお今後の詳しい考証を待たねばならないが、『新唐書』卷 225 上「逆臣伝安祿山条」に、

安祿山は営州柳城の「胡」である。もとの姓を康といい、母は阿史徳である。幼くして父を亡くし、母が安延偃に嫁いだのにしたが、安姓を名のようになった。六蕃の言語に通じ、互市郎となった。

とある。私は次のように考える。『安祿山事迹』卷上が引用する郭子儀が安思順の無実を訴えた疏には、安祿山の本来の姓は康であるとしている。今、敦煌写本の天宝年間の丁籍にもまた康・安・石などの姓があり、羯を称とする者である⁵³⁾（『歴史と地理』第 33 編第 4 卷「天宝十載丁籍」および同書第 41 編第 4 卷「天宝四載丁籍」を参照⁵⁴⁾）、だから安祿山の父方の家系は羯胡であ

51) 1947 年版は「又同書同卷石國傳云」。手写本は「又石國條云」とする。

52) 1947 年版は「舊書」。手写本は「舊史」とする。

53) 1947 年版は「今敦煌寫本天寶丁籍亦有康安石等姓以羯爲稱者」。手写本は「今敦煌寫本天寶丁籍俱有康安石等姓以羯爲名者」とする。

54) この『歴史と地理』は戦前の日本で刊行されたもので、その 33 卷（1 号～6 号）に那波利貞「正史に記載せられたる大唐天寶時代の戸数と口数との関係に就きて」上・中・下ノ上・下ノ下の 4 本の論考が収録されている。陳寅恪は、この雑誌に引用された敦煌文書を見たと思われる。東京女子大学の赤木崇敏教授の教示によれば、この敦煌文書は P.3559（那波論文「下ノ上」226 頁に文書番号の記載あり）であり、また 33 卷 4 号の那波論文「下ノ下」320 頁に、この敦煌文書は「天寶拾載以後に降らざるものかと察せられる」とあることから、陳寅恪はこの文書を「天宝十載丁籍」と記したのではないかと推測されている。ただ、『歴史と地理』は 34 号で終わっており、41 号は存在しない。したがって、「同書第肆壹編第肆卷」は謎で、「天宝四載丁籍」も何を指すのか不明である。

り、中央アジアの月氏種⁵⁵⁾であることは間違いないだろう。史思明の種族については⁵⁶⁾『新唐書』卷 225 上⁵⁷⁾「逆臣伝上」史思明に、

史思明は寧夷州の突厥種である。安祿山とおなじ郷里であり、六蕃の言語に通じ、また互市郎となった。

とある。おそらく史思明は中央アジア出身の「胡種」ではないのだろう⁵⁸⁾。しかし、『旧唐書』卷 200〔上〕「安祿山伝」には⁵⁹⁾、

安祿山は營州柳城の雜種胡人である（すでに先に引用したが、ここでは行論の便のため、特にかさねて引用する）⁶⁰⁾。

とあり『旧唐書』卷 200〔上〕「史思明伝」には、

史思明は……〔營州〕⁶¹⁾寧夷州の突厥の雜種胡人である。

という。また『旧唐書』卷 104「哥舒翰伝」に、

哥舒翰は、突騎施の首領である哥舒部落のながれをくむ者である。……翰の母は尉遲氏であり、于闐の一族であった。……（安祿山は）⁶²⁾哥舒翰にこう言った。「私の父は「胡」人で、母は「突厥」人である。君の父は「突厥」人で、母が「胡」人である。君とは同じ種族に属するのに、どうして互いに親しくしないのか？」

55) 1947年版は「月氏種」。手写本は「月氏種族」とする。

56) 1947年版は「至史思明之種族」。手写本は「之種族」を削除する。

57) 手写本は「上」を削除する。本訳注では1947年版および『新唐書』にもとづき「上」を付す。

58) 1947年版は「疑史思明非中亞胡種」。手写本は「似史思明非中亞胡種」とする。

59) 1947年版は「然舊唐書貳佰安祿山傳云」。手写本は「然細繹舊唐書貳佰安祿山傳云」とする。

60) 1947年版の「(すでに先に引用したが、……特にかさねて引用する)」は、手写本では削除。

61) 1947年版は「營州」省略。手写本では補う。該当箇所原文は「史思明、本名宰干、營州寧夷州突厥雜種胡人」。

62) 手写本では（ ）を外すが、1947年版の引用のほうが『旧唐書』原文通りである。

とある。これらの史料によると、初めてこれらを見たとき⁶³⁾、当時のいわゆる「雜種胡人」というのは、哥舒翰の事例のように⁶⁴⁾、混血した胡族を指すものに思えた。しかしさらに詳しく史伝を調べていくと、当時の「雜種胡人」の言い方は、実は直接に昭武九姓の月氏の種族を指していることが分かった⁶⁵⁾。たとえば、『新唐書』卷217上「回鶻伝上」(『資治通鑑』卷226、建中元年八月甲午の張光晟が突董を殺すの条も参照せよ)に、

当初、回紇が中国に来る時は、いつも「九姓胡」をまじえ、しばしば長安に逗留し、その数は千人にいたり、じゅうぶんに財産を蓄え増やしていた⁶⁶⁾。[ちょうど]⁶⁷⁾酋長の突董^{とつとう}翳蜜施^{えいびし}や大小の梅録^{ばいろく}⁶⁸⁾らが帰国する時、財物をつめた袋は途切れることなく続くほど多かった。

とある。この記述と『旧唐書』卷127「張光晟伝」にいうところの⁷⁰⁾、

建中元〔780〕年、回紇の突董や梅録たちがその配下の者や「雜種胡」を率いて長安から本国へ帰る時、車に金帛を載せ、その列は途切れることがなかった。

は、同じことを言っている⁷¹⁾。そして『旧唐書』の列伝のいう⁷²⁾「雜種胡」とは「九姓胡」であることが証明できる。そうならば、『旧唐書』で安祿山を「雜種胡人」というのは、じつは「九姓胡」を指して言っているのであり、また史思明を突厥の「雜種胡人」と見ているのは、その⁷³⁾父方が突厥人であり、母方が「羯胡」であり、そのことから「突厥雜種胡人」と言っ

63) 1947年版は「據此類史料、初視之」。手写本は「類史料、初視之」を削除する。

64) 1947年版は「如哥舒翰等之例」だが、手写本は「如安祿山哥舒翰等之例」とする。

65) 1947年版は「則知當時雜種胡人之稱實逕指昭武九姓月支種而言」。手写本は「則知所謂雜種胡人者逕指昭武九姓月支種而言」

66) 1947年版は「居貲置産甚厚」と引用するが、手写本は「居貲殖産甚厚」と修正する。

67) 1947年版の引用では「會」が抜けているが、手写本ではを加筆している。

68) 『騎馬民族史2 正史北狄伝』(平凡社、1972年、395頁)の訳注では、「突董」は突厥の官称号である吐屯(tudun)ではないかと推定し、翳蜜施は「itmiş」と読めるだろうとする。

69) 『騎馬民族史2 正史北狄伝』(平凡社、1972年、395頁)の訳注では、梅録を「buiruq」と読み、官称号もしくは人名とする。

70) 1947年版は「所言與舊唐書……」。手写本は「所言」を削除する。

71) 1947年版は「者同一事」。手写本は「一事」を削除する。

72) 1947年版は「舊傳之所謂雜種胡」。手写本は「所謂」を削除する。

73) 「その」は手写本では「史思明」とする。

いるのである。史思明と安祿山がともに「六蕃」の言語の通じ、互市郎になっていたことをみると、まさしく両者ともに中央アジアの「胡」種の血筋という特徴があり⁷⁴⁾、その史を姓とする者については、おそらく父系の突厥姓の阿史徳か、あるいは阿史那の略称によるもので、必ずしも母系の昭武九姓の史ではないだろう⁷⁵⁾。

また、安祿山と史思明が成長した場所、すなわち營州に、開元年間のはじめにすでに中央アジアのソグド商人が多くいたことを論証してみよう。たとえば、『旧唐書』巻185下「良吏伝」宋慶礼（『新唐書』巻130「宋慶礼伝」も同じ）に、

話はさかのぼるが、營州都督府が柳城〔遼寧省朝陽市〕に設置され、奚と契丹を制御した。武則天の時代、都督の趙文翽^{ちやうぶんかい}が營州の行政に失敗したため、奚と契丹は反乱をおこし、營州城を攻撃し陥落させた。その後、營州都督府を幽州の東、二百里にある漁陽城にうつして安置した。開元五〔717〕年、奚と契丹がそれぞれ塞門を叩いて帰順してきたので、玄宗はまた營州をもとの場所〔柳城〕に置こうとした。……そこで宋慶礼〔および太子詹事の姜師度、左驍衛將軍の邵宏〕に詔をし、ふたたび柳城⁷⁶⁾において營州城を築き上げさせた。……まもなく宋慶礼を御史中丞、兼檢校營州都督に任命した。〔宋慶礼は〕屯田八十餘所を開き、幽州および漁陽・淄青の世帯をもとめひきぬき、あわせて⁷⁷⁾「商胡」をまねき集め、そのために邸店や商店を建てた。

とある。これは必ず、この時の營州の管轄区域内やその近辺に西域の商人がいたので、宋慶礼は彼らをまねき集めることができたといえる⁷⁸⁾。だから營州という地は、開元以前にすでに中央アジアのソグド商人が多くいたことを知ることができるのである⁷⁹⁾。

さらに⁸⁰⁾試しに『新唐書』巻225上「逆臣伝上」安祿山（『安祿山事迹』も参考⁸¹⁾）を調べて

74) 1947年版は「正是具有中亞胡種血統之特徵」。手写本は「具有」を削除し「正是中亞胡人血統之特徵」とする。

75) 1947年版は「蓋從父系突厥姓阿史徳或阿史那之消稱、不必爲母系昭武九姓之史也」。手写本は「阿史徳」を削除し「蓋從父系突厥姓阿史那之消稱、不必爲中亞昭武九姓之史也」とする。

76) 1947年版の引用は「柳州」とするが、手写本は「柳城」と訂正する。

77) 1947年版では「あわせて（并）」が抜けているが、手写本では補う。

78) 1947年版は、この陳寅恪の解釈部分の冒頭、「寅恪案」を省略するが、手写本は補う。また、「宋慶礼は彼らをまねき集めることができたといえる」の前に、手写本は「然後」を加筆する。

79) 1947年版は「故營州一地開元以前已多中亞胡人、可知之矣」。手写本は「在」を削除し、「故營州一地開元以前已多中亞胡人、據此可知矣」とする。

80) 手写本は「さらに（原文：更）」を削除する。

81) 手写本は「（『安祿山事迹』も参考）」を削除する。

みると、

ひそかに「賈胡〔ソグド商人〕」を各地におくり、年ごとに百万にのぼる物を（幽州に）運びこんだ。

および、

〔安祿山は反乱を計画すること十余年〕およそ降伏してきた異民族の者たちには恩恵をもって接した。……安祿山は異国の言語に通じ、みずからなくさめいたわり、すべて捕虜を釈放して戦士とした。そのため部下たちはよろこんで死ぬことをささげたので、戦闘において敵する者がいなかった。

とあり、このことは、安祿山がその中央アジアのソグド人の商業言語〔ソグド語〕を利用するのに特に優れていた例証といえる。

また、たとえば、

同羅・降伏した〔奚や〕契丹人⁸²⁾・曳落河の八千人を養い飯子とした。

および、

安祿山はすでに〔ウイグルの〕（阿）布思の部族民を手におさめたので、〔唐をふくめた東ユーラシア〕世界でもっとも優れた軍となった⁸³⁾。

とあるのは、安祿山が混淆した血筋の「胡人」⁸⁴⁾を利用する地位にあり、さまざまな戦闘能力の高いエスニック集団⁸⁵⁾をたくみにまとめあげ、そしてその軍事力を増強した例証といえる。

故に『新唐書』巻118「韋湊伝」附〔韋〕見素に、

82) 手写本は「奚・契丹」とする。

83) 『新唐書』「逆臣伝」安祿山の当該箇所陳寅恪の引用は、1947年版では「祿山已得（阿）布思之衆、則兵雄天下」とし、手写本では「祿山已得（回紇阿）布思之衆、則兵雄天下」。中華書局標点本の原文は「祿山已得布思衆、則兵雄天下」である。

84) 1947年版は「混合血統胡人」。手写本は「雜種胡人」とする。

85) 1947年版は「不同之善戰胡族」。手写本は「之」を削除する。

明年（天宝十四載）、安祿山は表を奉り、蕃將三十二人を漢人の將軍と代えることを願い出たので、玄宗皇帝はこれを許した。韋見素はよろこばず、楊国忠にこう言った。「安祿山は謀反をおこし天下をひっくり返そうとしております。今、また蕃人をもって漢人に代えることは、わざわざがまさに起こることになりましょう」と。……ほどなくして、安祿山は反乱をおこした。

とある。このことに拠れば、安祿山の挙兵と胡漢民族の武力問題とは関係があることがわかる。『旧唐書』卷106「李林甫伝」（『新唐書』卷223上「姦臣伝」李林甫も同じ。『大唐新語』卷11「懲戒編」および「諛佞編」も参考にすべきである）に、

唐は武徳・貞観以来、阿史那社爾や契苾何力のような蕃將は、忠孝にして才略が有るものでもまた、大將の任務を全面的に任せることはせず、多くは重臣にそのことを統べさせて〔蕃將を〕コントロールした。開元年間に、張嘉貞・王峻・張説・蕭嵩・杜暹はみな節度使を経て中央政府へ入り政務にたずさわった。〔李〕林甫はその地位をしっかりと守るため、節度使として地方に出向し、中央にもどって宰相となる源を閉ざそうと考え、かつて上奏して次のように述べた。「文官が〔將〕〔節度使〕となっても、弓矢や弩石に当たることにおびえるので、寒族や蕃人を用いるのがいいでしょう。蕃人はよく戦い勇敢で、寒族には〔政界における〕仲間というものがおりません」皇帝〔玄宗〕はもともとだと思い、そこで安思順を用いて李林甫に代わってその〔節度使の〕任務を統べさせた。これより高仙芝・哥舒翰はともに大將〔節度使〕に専任されたが、李林甫は彼らが文字を知らないことを利用し、中央政府に入って宰相となる理由を無くした。しかし安祿山がついに世の中を乱すことになったが、それはもっぱら大將の任を得ることができたことによるのだ。

この寒族や蕃人という語句は唐代の支配階級のすべてに及ぶもので、後論をまつことにする。しかし安史の乱のキーポイントが実に將軍たちの種族にあることは、『新唐書』「韋見素」の一伝と相互に照らして証することができるのだ。また『旧唐書』卷199上「東夷伝」高麗に、

〔高句麗の王族である泉男生の息子の〕（泉）獻誠は右衛大將軍を授けられ、そのうえ羽林衛上下となった。天授年間（690/10-692/4）のこと、武則天はかつて金、銀、宝物を手元から出し、宰相および南北衛の文武官に命じ、弓矢を射ることに秀でていた者五人を選び、共にこれに賭けさせた。内史の張光輔は先に獻誠に譲って第一位とし、獻誠はさらに

右玉鈴衛大將軍の薛吐摩支に譲り、摩支はまた献誠にゆずった。まもなく献誠は上奏してこう言った。「陛下は弓矢を射ることができる者五人を選ばせましたが、〔選ばれることを〕得た者は多くは漢人の武官ではありませんでした。⁸⁶⁾ 臣はこれより後、漢人の武官で射術に巧みであるという名誉がなくなることを恐れます。伏して望みますに、このような射撃の競技をおやめくださいますように」と。武則天はよろこんでこの言葉にしたがった。

私の考えはこうである。泉献誠、薛吐摩支は二人とも蕃将であり⁸⁶⁾、武則天時代の蕃将の軍事能力は漢人よりはるかに優れていた⁸⁷⁾。それゆえ、『鄴侯家伝』に府兵制の崩壊は武則天時代に始まると言うのは⁸⁸⁾、これも一つの傍証である。思うに、宇文泰が糾合した六鎮と関隴地域の胡漢の混合⁸⁹⁾集団は武曌の時に至ってすでに崩壊し始め、玄宗の御世を待たずに、漢人の將軍、すなわちこの混合集団の首領は⁹⁰⁾、蕃人の將軍の戦闘力に及ばないことは、すでにこのようであった。泉献誠は蓋蘇文⁹¹⁾の孫で、男生⁹²⁾の息子で、滅亡した国〔高句麗〕から降伏した者の後裔であるが⁹³⁾、その武芸は精妙で当時第一位と称された。とするならば、高句麗が、東の隅にある小国をもってしばしば⁹⁴⁾隋唐両王朝が全盛期の国をあげての軍隊⁹⁵⁾に対抗できたことに、どうして理由がないだろうか！いや理由があるのだ！⁹⁶⁾

つぎに『新唐書』第127巻「張嘉貞伝」附「弘靖伝」（『旧唐書』第129巻「張延賞伝」附「弘靖伝」も同じだが⁹⁷⁾、「俗謂祿山・思明爲二聖」の文は無い⁹⁸⁾）にだいたい次のようにある。

86) 手写本は「泉献誠、薛吐摩支は二人とも蕃将であり」を削除する。また、1947年版は「薛吐摩支」を「薛土摩支」に誤る。

87) 1947年版は「已遠勝於漢人」。手写本は「已遠」を削除する。

88) 1947年版は「鄴侯家傳言府兵制之破壞實始於則天時」。手写本は「之」と「實」を削除する。

89) 手写本は「混合」を削除する。

90) 1947年版は「而漢將即此混合集團之首領、其不如蕃將之善戰已如此矣」。手写本は「即此混合集團之首領、其」を削除し、「而漢將之不如蕃將之善戰已如此矣」とする。

91) 蓋蘇文は高句麗末期の將軍。

92) 泉男生は高句麗の政治家・軍人。蓋蘇文の子。兄弟間の争いのために唐に服属した。

93) 手写本は「滅亡した国〔高句麗〕から降伏した者の後裔であるが（1947年版原文：亡國降敗之餘裔）」を削除する。

94) 1947年版は「屢」。手写本は「久」とする。

95) 1947年版は「隋唐全盛之日傾國之師」。手写本は「隋唐全盛時傾國之師者」とする。

96) 1947年版は「豈無故哉」とあり、2回繰り返される。

97) 1947年版は「附弘靖傳同」。手写本は「附弘靖傳略同」とする。

98) 1947年版は「但無「俗謂祿山思明爲二聖」之語」。手写本は「之」を削除する。

〔張弘靖は〕盧竜節度使に任命された。はじめて幽州に入ると、……〔幽州では〕安祿山と史思明が「二聖」と言われる風習があった。弘靖は〔安祿山が〕乱を始めたことを懲らしめ、幽州の風習を変えようとした。そこで〔安祿山の〕墓を掘って棺を破壊したので、民衆はますますよろこばなかった。……幽州と薊州〔幽州盧竜軍節度使〕は当初、帰順したものの、当地の風俗によって反逆を抑えることができず、そのため范陽はふたたび反することになった。

私は次のように考えている。「聖人」は唐の時代における天子の俗称である。例えば、『資治通鑑』巻222上元二年三月条⁹⁹⁾（『旧唐書』巻200上、『新唐書』巻225上「史思明伝」附朝義もほぼ同じ）に、

〔史〕朝義は泣いてこう言った。「諸君、うまくこれを為せ、聖人を驚かさないようにしろ」と。

胡三省の注には次のようにある。

当時、臣下は天子を聖人と呼んだ。

思うに¹⁰⁰⁾、安祿山と史思明は二人とも皇帝を称したので、彼らの統治下にあった者たちが〔彼らを〕聖人と称していたことは¹⁰¹⁾、おかしいことではない。注意すべきなのは¹⁰²⁾、穆宗の長慶年間の初めは、安祿山と史思明が皇帝を称していた¹⁰³⁾時代からすでに六、七十年を隔てているにもかかわらず、河朔の地では安祿山と史思明になおこの尊号が残っており¹⁰⁴⁾、中央政府の官人はその旧習に従うことができずに、当地の反乱を招いた。そうならば、安祿山と史思明の勢力が河朔¹⁰⁵⁾の地において深くかつ長く残っていたことが分かる。ここでは、両唐書

99) 1947年版は「如通鑑貳貳上元二年三月條……」。手写本は「如」を削除する。

100) 1947年版は「蓋」。手写本は「寅恪案」とする。

101) 1947年版は「故在其統治之下者率以聖人稱之」。手写本は「在」と「者率」を削除する。

102) 手写本では「注意すべきなのは」と「穆宗の長慶年間の初めは、」の間に「張弘靖節度盧龍在」を加筆する。

103) 手写本は「皇帝を称していた」を削除する。

104) 1947年版は「河朔之地祿山思明猶存此尊號」。手写本は「祿山思明」を削除する。

105) 手写本は「河北」とする。

に記載される安祿山・史思明と同時代の人およびその後の河朔とその他の藩鎮¹⁰⁶⁾の人で胡化した事跡を以下に抜き出してみたい。〔そうすれば〕その種族と文化の関係は解釈を待たずして自然に明らかになるだろう。それらの人たちの生没年や唐朝に対する姿勢の逆順、そして徳行があるかどうかはそれぞれ異なるけれども¹⁰⁷⁾、そのことは本論で論じる範囲ではないので¹⁰⁸⁾、それらに対する見解は述べないものとする。

(続く)

106) 1947年版は「其他藩鎮」。手写本は「其他諸藩鎮」とする。

107) 1947年版は「雖各有不同」。手写本は「各」を削除する。

108) 1947年版は「但非此篇所論範圍」。手写本は「篇」を削除する。